

國學院大學學術情報リポジトリ

青森県平内町槻ノ木遺跡・一本松遺跡出土資料の研究：

十腰内I式期の土器器種と土製品・石製品を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿部, 昭典, 加藤, 元康 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002004

青森県平内町槻の木遺跡・一本松遺跡出土資料の研究

—十腰内I式期の土器器種と土製品・石製品を中心に—

阿部 昭 典 ・ 加 藤 元 康

要旨

國學院大學考古学資料館所蔵の青森県平内町槻の木遺跡、一本松遺跡出土資料には、縄文時代後期前葉（十腰内I式期）に関わる資料が含まれている。本プロジェクトの「祭祀遺跡に見るモノと心」では、東北地方北部の縄文後期前葉を研究対象としており、本研究において重要な資料であることから、両遺跡の十腰内I式土器と当該期の土製品、石製品を図化して観察所見を報告する。土器に関しては、完形復元資料2点を含めた良好な資料、土製品と石製品ではこの時期の特徴的なミニチュア土器や鐸形土製品2点、三角形岩版3点が含まれる。

さらに、十腰内I式期の土器器種構成は、他地域と影響関係が強まる中であっても、東北地方北部の地域性が強く示される。これらを東北地方南部の網取式土器と新潟の南三十稲場式土器との器種構成の比較を行い、東北地方北部の地域性を明らかにする。

キーワード

槻の木遺跡、一本松遺跡、十腰内I式、土器器種、鐸形土製品、三角形岩版

1. はじめに

國學院大學考古学資料館所蔵資料のなかで、縄文時代後期前葉の十腰内I式に関連する資料として、青森県槻の木遺跡と一本松遺跡出土資料がある⁽¹⁾。槻の木遺跡は、青森県東津軽郡平内町小湊字槻の木に所在し（第1図）、出土資料は少なくとも縄文時代中期前葉から晩期、続縄文、古代などの資料が確認される⁽²⁾。また一本松遺跡は、槻の木遺跡から東南東に約2km離れた同町松野木字一本松に位置しており（第1図）、縄文時代後期前葉などの資料が出土している⁽³⁾。

「祭祀遺跡に見るモノと心」グループでは、東北地方北部を研究対象地域の一つとしており、縄文時代後期前葉を中心としている。このことから所蔵資料の整理を行い、平成21年度の春季企画展「祭祀遺跡・神社祭礼・國學院の学術資産」⁽⁴⁾において、その成果を公開した。また2009年5月に遺跡現地踏査とともに、同年7月に国立歴史民俗博物館が所蔵する槻の木遺跡出土資料の資料閲覧を行った。資料の多くは、縄文時代晩期に帰属するもので、十腰内I式期と関連する資料は、キノコ形土製品が1点確認されたのみである。本論では、槻の木遺跡と一本松遺跡出土の十腰内I式土器を中心とする資料を報告

し、若干の考察を加える⁽⁵⁾。

2. 出土資料

槻の木遺跡と一本松遺跡の十腰内I式期に関連する資料は、土器・土製品・石製品などで、土器は復元個体2点、破片資料19点（全て槻の木遺跡）を報告する。土製品は、ミニチュア土器9点（うち2点は一本松遺跡）、鐸形土製品2点（一本松遺跡）、石製品は、三角形岩版3点（うち2点は一本松遺跡）、がある。

1) 土器（第2図～第5図・第1表）

出土土器はすべて槻の木遺跡出土であるが、ほぼ十腰内I式土器の古段階と新段階に位置付けられる。十腰内I式土器の編年は、葛西勲（1979）や成田滋彦（1981・1989）、金子昭彦（1996）、鈴木克彦（1998）、児玉大成（1999・2003）、榎本剛治（2008）などがある。十腰内I式期以前のいわゆる「前十腰内I式」（葛西1979）には、「葦窪式・上村式」（本間1985）、「蛭沢式」（成田1981・1989）、「牛ヶ沢（3）式、沖附（2）式、弥栄平（2）式」（成田1989）、「馬立式」（鈴木1998）、「湯舟沢A式」（鈴木2000）、「小牧野3期」（児玉1999）、「薬師前式」（鈴木2001）など諸型式が提唱されている。これらは、関東地方の称名寺II式から堀之内I式前半といった狭い時間幅にほぼ収まると

考えられ、これらの変遷観にはやや混乱が見える。一方、十腰内I式土器は研究者によって細分の違いがあるものの、ほぼ二段階変遷で一致しており、従来の編年観を踏まえて槻の木遺跡出土資料の編年的位置づけを検討したい。

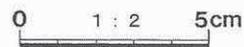
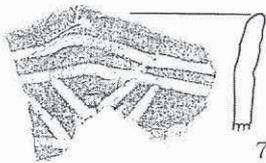
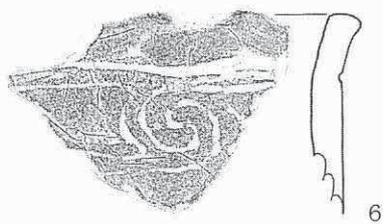
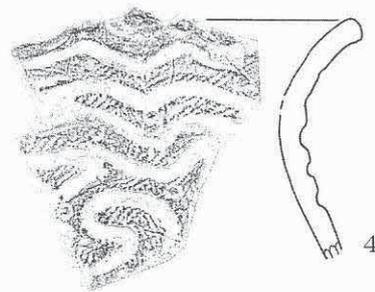
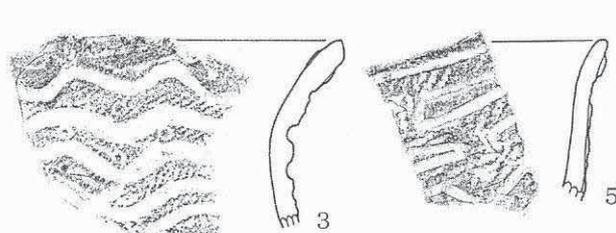
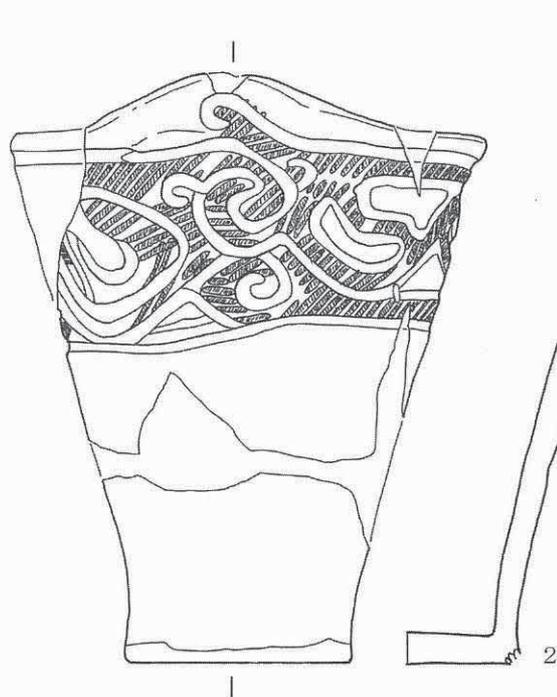
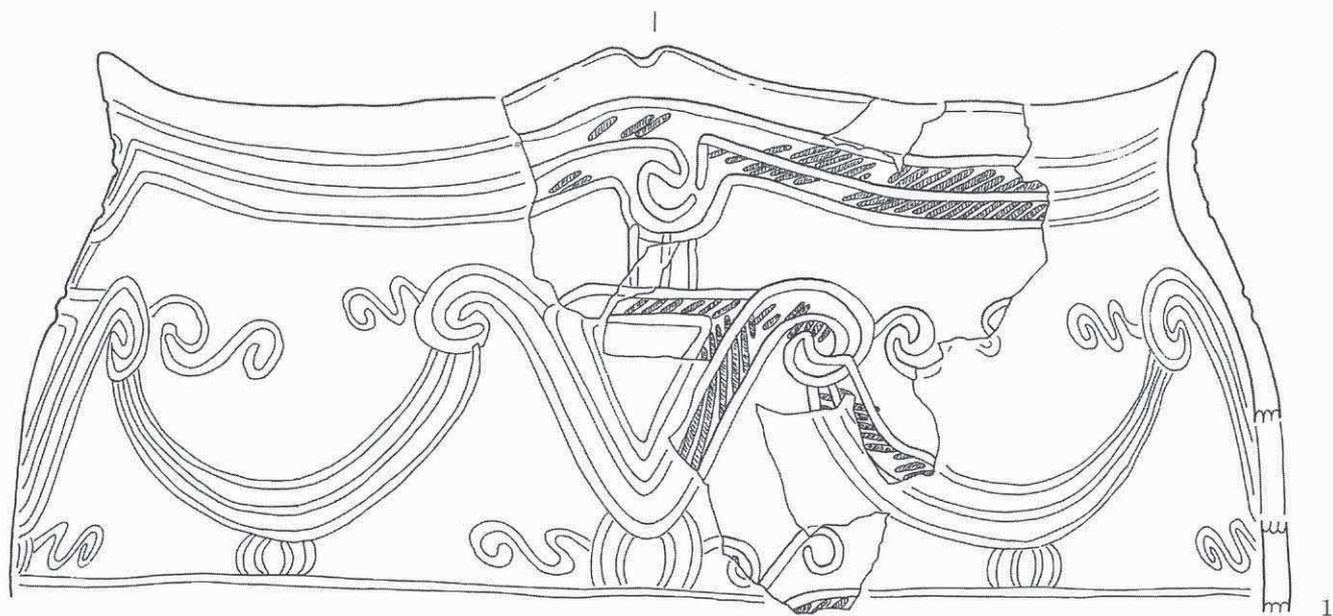
槻の木遺跡出土の後期前葉の深鉢は、①沈線帯の中に縄文を充填する磨消縄文の一群(第2図1~5)、②地文を持たずに2~3本の沈線のみで施文する一群(第2図6~8)、③2本の沈線帯の中に条線文や平行沈線文を充填する一群(第3図1~6)がある。当該期の壺形土器も多く出土し、①隆帯上に縄文を回転施文する一群(第3図7)、②隆帯と沈線によって描出する一群(第4図1~3)、無文地に沈線によって文様を描く一群(第5図1・2)がある。台付鉢も1点確認され、沈線文のみで文様を描出している(第5図3)。加えて、一本松遺跡出土

資料であるが、狩猟文土器の破片資料もあり、合わせて報告する。各資料について文様を中心に記述する。

第2図1は、小破片を接合した資料で、深鉢形土器の口縁部~胴部にあたる。本資料は、4単位の波状口縁と考えられ、波頂部が窪んで二つ山になる。文様は、磨消縄文によるもので、口縁部には3本の横位沈線文がめぐり、波頂下に小さいJ字状の懸垂文が付く。この沈線帯には横方向に縄文Lが横回転で施文される。胴部文様は、上下の横位胴部区画の間には、逆三角形区画を中心に両側に弧状沈線文が展開し、端部が渦を巻く。これらも3本の沈線文で描かれ、沈線間に縄文Lが充填される。この文様間の空間には、横S字状文が単沈線で描かれる。また縄文施文後に沈線が引き直されており、無文部にはよく磨きを加えられている部分が目立つ。



第1図 槻の木遺跡・一本松遺跡位置図(文化財保護委員会1967より)



第2図 槻の木遺跡出土土器(1)

第2図2は、完形復原された2単位の波状口縁の深鉢で、器高約15.6cm、口径約12.2cm、底径約5.8cmの比較的小形の土器である。口縁部や胴部、底部の周縁を欠損している。文様は、口縁部の上半部に限定され、胴部は無文になる。口縁部の文様は、渦巻文や三角形区画が入り組んだ文様が描かれて、一部無文部を残して、縄文Lが横回転で充填される。施文順序は、沈線区画後に縄文が充填されると推測されるが、沈線によって縄文が切られる部分が多く、沈線が引き直されている可能性がある。また区画外に縄文がはみ出す部分があり、磨り消し部分も明確ではない。

第2図3は、深鉢の口縁部資料で、波状口縁の波頂部は三つに分かれており、この三つ山の表裏面には幅4mmほどの粘土紐が弧状に貼り付けられている。この口縁部には、横位波状文が5段描かれ、その後縄文Lが横回転で施文される。沈線文は約3.5mm～4mm幅で、沈線間には径約4mmの円形刺突文が付加され、円形刺突文は管状工具による施文である。

第2図4は、3と同一個体と考えられる口縁部資料で、波頂部は同様に三つの山に分かれており、粘土紐が内外面に貼付される。口縁部文様は、波状沈線文が横位に4段めぐり、その下部には弧状沈線文が垂下しており、J字状の懸垂文の先端部の可能性がある。

第2図5は、深鉢の口縁部資料で、波状口縁の波底部に近い部分である。文様は、幅4mm～5mm程の粘土紐を貼り付けてその上から縄文LRを横方向に回転施文する。貼付文の接地面には調整が加えられないが、これに沿って沈線が引かれる。

第2図6は、口縁部資料で、3本の粘土紐を捻じり鉢巻き状に入り組ませて突起を作出する。口縁部文様は、沈線による渦巻文と横位の方形区画文が描かれる。器面にはよく磨きを加えられ、これによって沈線が潰れる部分が見られる。

第2図7は、口縁部資料で、波状口縁の比較的小形の深鉢と考えられる。文様は、無文に沈線文を描くもので、口縁部に2本の横位沈線区画がめぐり、その下部に三角形の区画が見られる。

第2図8は、深鉢の胴部資料で、3本1組の沈線でS字状などの文様が描かれる。これら沈線文は、半截工具などによる一括施文ではなく、単沈線に

よって描かれたものと考えられる。

第3図1は、口縁部から胴部にかけての比較的大形の破片資料である。4単位の波状口縁の深鉢になると推測される。文様は、口縁部上端部と胴部を横位に区画して、区画内に曲線的な入り組み文が描かれる。これらの曲線文は、2本の沈線帯のなかに櫛歯状工具による条線文が充填される。また一部に補修孔が1ヶ所認められる。

第3図2は口縁部資料で、4単位の波状口縁の深鉢と推定される。口縁部文様には、沈線による三角形区画文などが描かれ、沈線帯の内側には平行沈線文が充填される。無文部にはよく磨きが施される。

第3図3は2と同一個体で、4単位波状口縁の深鉢と推定される。横に間延びした三角形区画とこれを区画する沈線帯の中に平行沈線文が充填される。

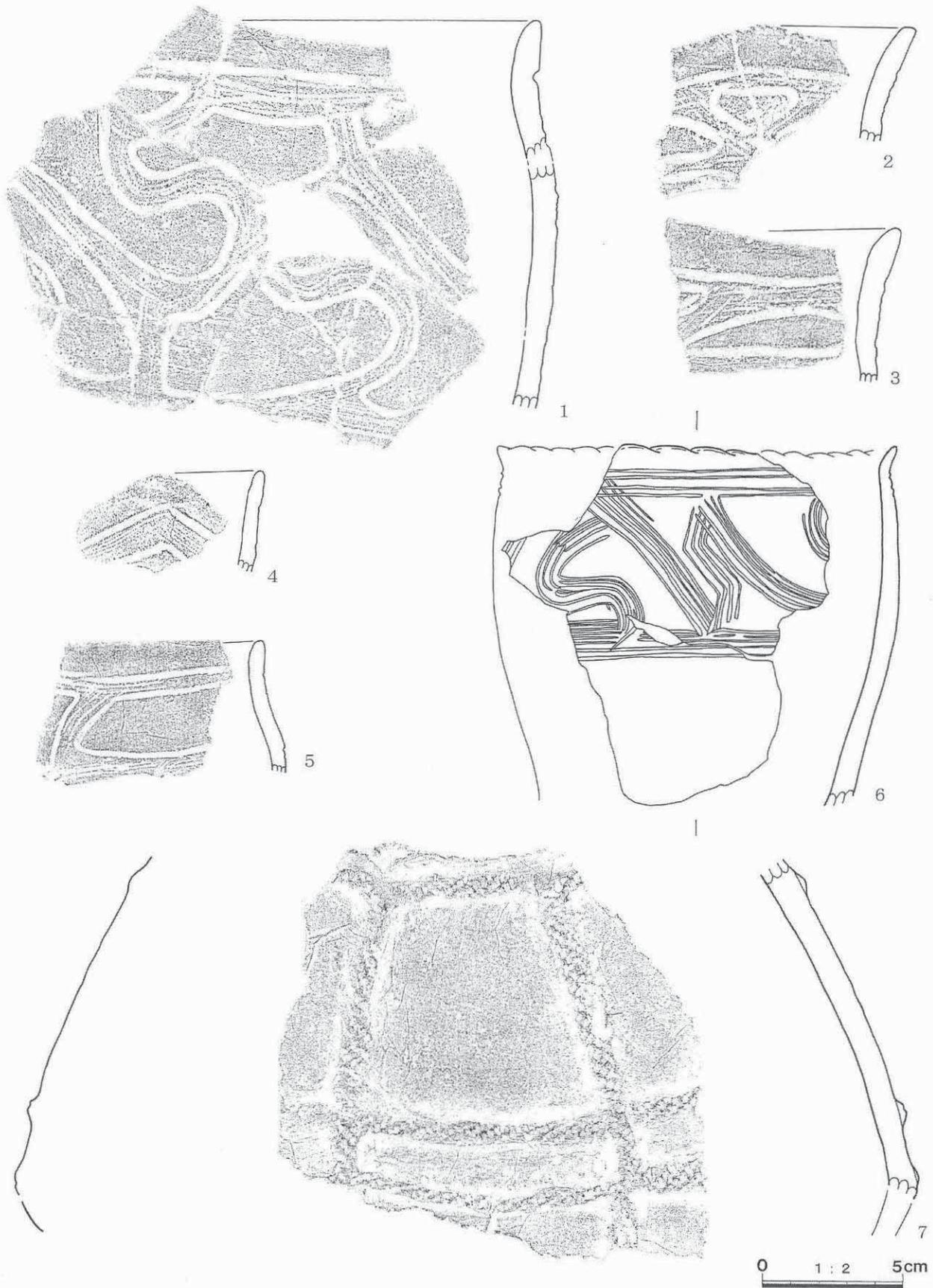
第3図4は、口縁部資料で、これも4単位の波状口縁の深鉢であると推測される。波頂部には粘土紐が巻かれて、平坦に潰れて貼り付けられているが、器面との接地面はそのまま残される。口縁部文様は、波状口縁に沿って沈線区画が2本の沈線によって描かれ、沈線帯の内側には櫛歯状工具によると推測される条線文が充填される。

第3図5は、口縁部資料で、クランク状の沈線文が描かれる。沈線間には幅約2mmの平行沈線文や条線文が充填され、無文部にはよく磨きを加えられる。

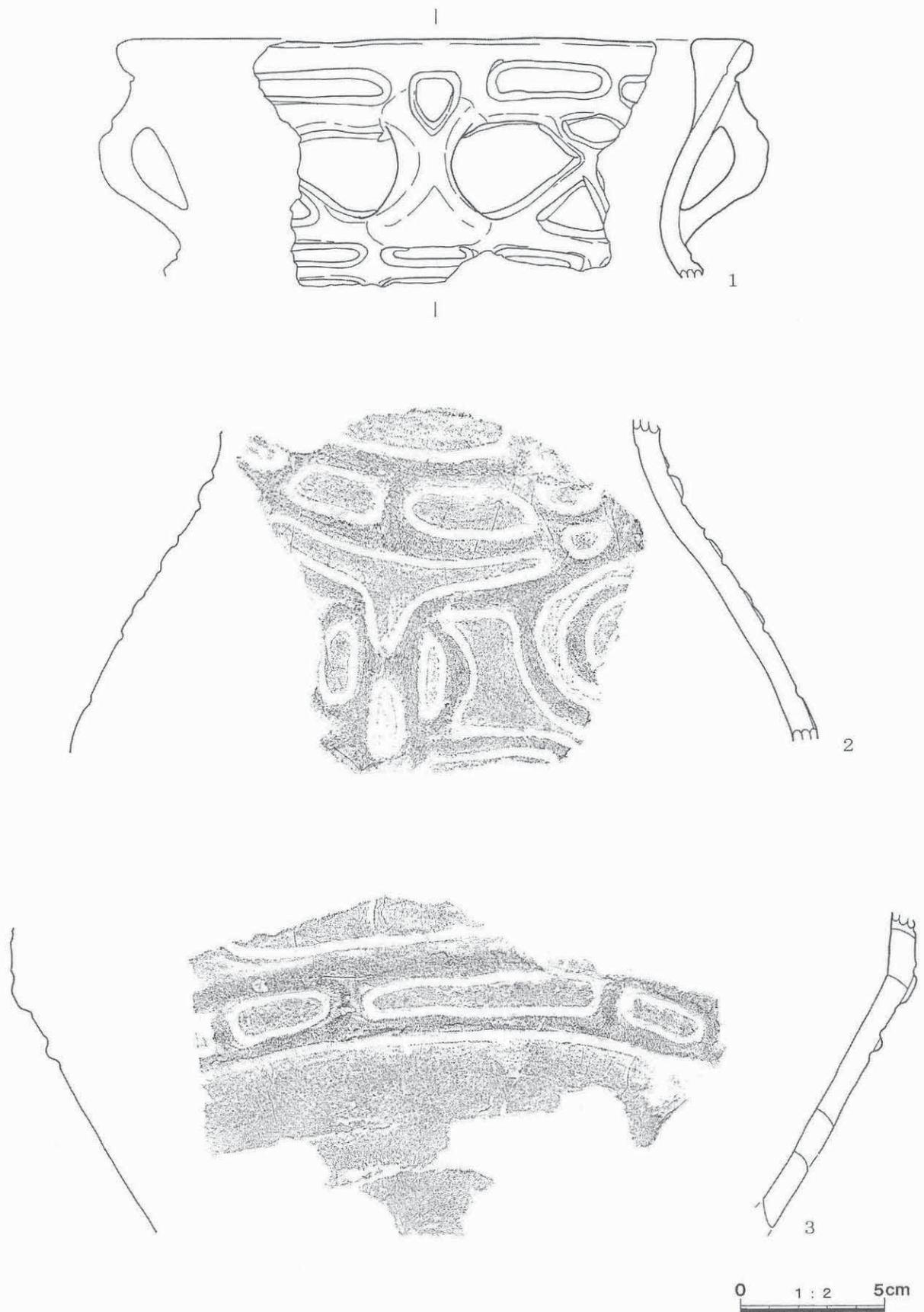
第3図6は、口縁部から胴部下半部までの破片資料であり、口径約14cmの比較的小形の深鉢である。口縁部は平口縁であるが、粘土の貼付によって小波状が連続して作出される。口縁部から胴部にかけて横位に文様帯が区画されて、その中に斜位の沈線区画やS字状文が描かれる。これらの沈線文は、5本単位の櫛歯状工具により描かれており、第3図1～5のように沈線帯の中に平行沈線文や条線文を充填する描出手法とは異なる。

第3図7は、壺形土器の胴部資料であり、時期的に十腰内I式期以前に位置づけられ、胎土も他の土器とは異なる。文様は、隆帯を格子目状に貼り付けて、その隆帯上に縄文LRを隆帯の軸方向に回転施文する。胴部の無文部にはよく磨きを加えられる。また内外面ともに、赤彩の痕跡は認められない。

第4図1は、壺形土器の口縁部資料で、橋状把手が付属する部分にあたる。平口縁で、口唇部は粘土



第3図 榎の木遺跡出土土器(2)



第4図 櫛の木遺跡出土土器(3)

帯の貼り付けによって肥厚して1.5cm前後の平坦面を作出する。この粘土接合面には、粘土接合以前に描かれた沈線が口端部より1cm下部にめぐるのが確認される。文様は、隆帯の貼付と沈線により、横位楕円文や三角形区画文、菱形区画文が描かれる。内外面には赤彩痕がよく残っており、肉眼観察ではベンガラによるものと推測される。

第4図2は、壺形土器の胴部資料で、橋状把手が欠損する部分がある。文様は、無文地に隆帯と沈線によって区画文を描く。区画文は、横長や縦長の楕円区画文、渦巻文などが描かれる。また部分的に褐色の付着物が観察され、赤彩の一部と見られる。

第4図3は、壺形土器の胴下半部の破片資料である。胴部最大径直下に横位にめぐると2本の隆帯を、上下で連結することで横位楕円文が連続的に区画される。隆帯に沿って沈線文がめぐり、胴部上半部には沈線による文様が描かれる。

第5図1は、壺形土器の頸部にあたる部分で、橋状把手が欠損する部分がある。文様は、無文地に沈線文を描くもので、横位の区画文や円形文・楕円文などがある。橋状把手が付属する帯状部分が隆帯の貼付によってやや隆起する。無文部には、よく磨き加えられ、内面に赤彩痕が部分的に残る。

第5図2は、壺形土器の胴下半部と考えられる資料で、底径約10.4cmである。底部はやや上げ底になっており、縄状の圧痕が2、3ヶ所確認される。胴部最大径直下の沈線区画より下は、無文部になる。胴部の横位区画は、3本の沈線によって区画され、その上部には斜位の沈線文などが見られる。

第5図3は、台付鉢で、口縁部から胴部の一部が欠損するが完形に復元される。大きさは、器高約10.2cm、口径約14.6cm、底径約8.2cmの比較的小形の土器である。文様は、口縁部が2本の沈線によって区画され、胴部に3本1組の沈線帯により三角形区画を描く。また赤彩などは明確ではない。

第5図4は、狩猟文土器の動物文の破片である。豆状の粘土を貼り付け、先端に刺突を加えて頭部を表し、そこから隆線を垂下させて胴体から尻尾までを表現し、背部は隆起させている。隆起させた背部の上下に横方向の隆線を付けて、四肢を表す。動物文の横には縦方向の隆帯と、LRの縄文が施されており、隆帯区画内に動物文が施されていたと考えら

れる。器面は磨かれており、黒色を呈する。この動物文の姿勢は、縄文人の視点に注目した分析による表現方法と一致する(加藤2009)。

2) 土製品・石製品(第6図)

a. ミニチュア土器

ミニチュア土器は、9点確認され、明瞭に後期前葉に位置付けられる資料は6点、やや時期不明なのが3点ある(第6図1~9)。器種も単純ではなく、深鉢や台付鉢など通常の土器と同じようなバリエーションを示している。これらは手捏ねではなく、輪積み法で製作されていると考えられる。

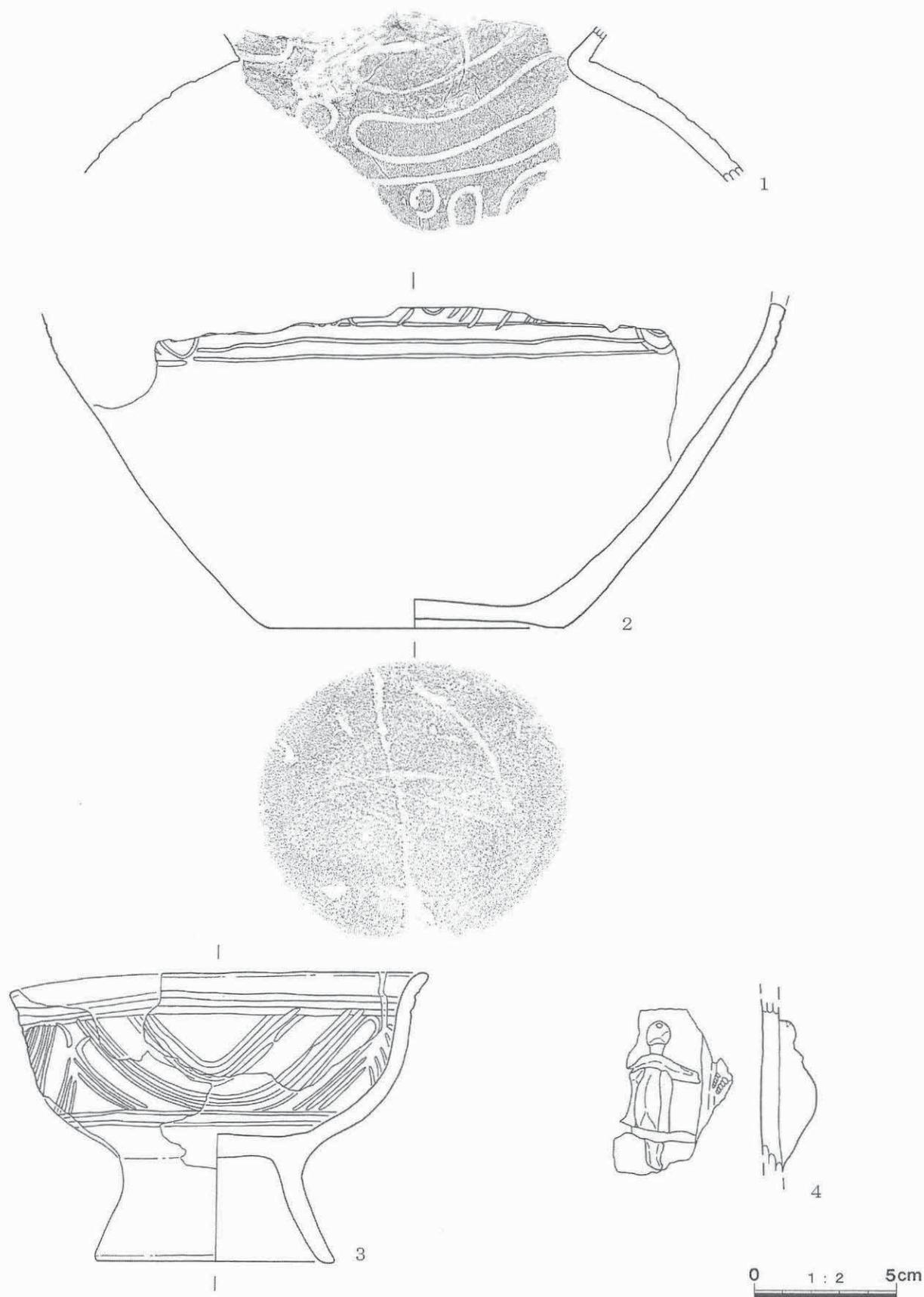
第6図1は、4単位波状口縁の深鉢形を呈しており、磨消縄文により曲線的な文様を描く。口径は約6cmと推測される。沈線によって区画された部分に縄文LRを横方向に回転施文している。無文部も磨き加えられる。外面にススの付着が見られるが、内面にはコゲは確認されない。

第6図2は、4単位の緩い波状口縁の深鉢形を呈する。大きさは、器高約10cm、口径約8.4cm、底径約5cmの完形品である。文様は、口縁部の横位の沈線区画内に円形文と横位楕円区画を交互に描く。器面には、赤彩や炭化物の付着は認められない。

第6図3は、器形的には浅鉢形を呈するもので、口縁部に4単位の貼付文を持つ。大きさは、器高約8.7cm、口径約9.4cm、底径約5.4cmの完形品である。口縁部の括れ部分には、横位の沈線区画がめぐり、胴部には2本1組の沈線によって横S字状文などの曲線文が描かれる。これも赤彩や炭化物の付着は認められなかった。

第6図4は、口縁部から底部までの破片資料で、口縁部と底部が存在するが、完形復元できなかった。大きさは、口径約9cm、底径約6.5cmで、器高は不明である。口縁部は平縁になると推測される。頸部の括れ部は2本の沈線文が横位にめぐり、胴部は縦位懸垂文によって区画される。また胴部区画内には、鋸歯状の懸垂文が垂下する。器面には、スス・コゲなどの付着物、赤彩は確認できなかった。

第6図5は、深鉢形ミニチュア土器の胴部資料で、胴部最大径は約11.8cmと推測される。文様は、無文地に2本~3本1組の沈線帯で横位沈線区画と大柄な渦巻文を描く。内外面には、スス・コゲなどの付着物や赤彩痕は確認できない。



第5図 榎の木遺跡・一本松遺跡出土土器

第6図6は、台付鉢で、胴部上半部を欠損する。台部の底径は約10cmで、3ヶ所に三角形の刻みが入り、貫通孔が中心軸上に2つ存在する。胴部の屈曲部分には横位の沈線区画がめぐり、これに縦位の懸垂文が直交する。この懸垂文と横位区画には隆帯が貼付されて、隆帯上には管状工具による円形刺突文が加えられる。この間には、沈線帯によって方形状の区画が描かれる。器面上には炭化物などの付着物や赤彩は認められないが、内面の所々にクレーター状に剥離する箇所が認められる。

第6図7は、台付鉢で、口縁の一部や台部分を欠損する。文様は、口縁部に1本の沈線区画がめぐるとのみである。また内外面には、スス・コゲなどの付着物や赤彩痕は認められない。

第6図8は、台付鉢の破片資料であり、帰属時期も明確ではない。文様は、口縁部に1本の沈線がめぐるとのみである。また内外面には、スス・コゲなどの付着物や赤彩痕は認められない。

第6図9は、鉢形を呈する破片資料である。文様は、縄文LRを横回転で施文するのみの簡素なもので、口縁部と底部に近い部分は無文になる。内外面に、炭化物などの付着物や赤彩は認められないが、6と同様に内外面にクレーター状の剥離痕が見られる。

これらのミニチュア土器は、クレーター状の剥離痕があるものの、煮沸に伴うスス・コゲや漆に関連するような痕跡は確認できなかった。以前、中期末葉の徳利形土器について検討を加えた際も、出土状況に特殊性が見られたが、直接用途を示すような痕跡は確認できなかった(阿部2009a)。しかし、他の遺跡では10cm未満でも煮沸痕を有するものや漆の生成に関連すると思われるミニチュア土器が存在している。このことは、ミニチュア土器といっても手捏ねと輪積みに製作手法や大きさの違いがあり、単純に一つのカテゴリーでは捉えられない複数の用途を有していると考えられる。

b. 鐸形土製品

第6図10は、頭頂部から内部まで貫通する孔を有する鐸形土製品である。頭頂部下に1条、開口部に二条の沈線を巡らし、区画内を渦巻状の沈線を連結させる文様を施している。大きさは長さ約4.2cm、幅約3.4cm、厚さ約0.4cmである。

第6図11は、頭頂部下と開口部に1条の沈線を有

し、側面に縦方向の沈線を有する鐸形土製品である。大きさは長さ約6.2cm、幅約3.5cm、厚さ約0.4cmである。内面に黒色付着物が認められたが、自然科学分析では有意義な結果は導き出せなかった⁽⁶⁾。

これらの鐸形土製品は、ほぼ十腰内I式期を代表する土製品のの一つであり、本土器様式分布圏に広がりを持つ。用途に関しては明確ではないが、内面に付着している黒色物質が特徴として指摘されており(高橋1976、遠藤1987、成田2007、阿部2010)、今後これらの付着物を含めた解明が必要である。

c. 三角形岩版

第6図12は、槻の木遺跡出土の砂岩製の三角形岩版で、三角形の角部分が欠損している。無文で、背面や正面中央部には研磨が施されるが、側面側には研磨痕が顕著ではない。

第6図13は、一本松遺跡出土の多孔質安山岩製の三角形岩版で、文様は施されていない。背面は、平坦で研磨痕が見られ、表面には、研磨によって複数の研磨面が形成される。これらの研磨面には、研磨の方向を示す明確な研磨痕が確認される。

第6図14は、一本松遺跡出土の三角形岩版で、軟質の石材(珪化木?)で作られており、文様を有するなど前二者とは異なる。文様は、表面に対向する弧状沈線文が2本1組で描かれる。裏面には、研磨痕らしき縦方向と横方向の線状痕が残される。

この種の石製品は、東北地方や新潟に分布する三角形土版や三脚石器、土偶との関連性が指摘されてきている(江坂1960、成田1974、金子1982ほか)。そのなかでも三角形岩版は、青森平野に集中した分布を示し、十腰内I式土器分布圏内に普遍的に広がるわけではない。当地域の三角形岩版の研究は、葛西勲(1970・2002)や児玉大成(1997・2001)による研究がある。児玉(2001)は、小牧野遺跡を中心として三角形岩版を分析し、研磨作業の有無によって、「小牧野型岩版」と「伊勢堂岱型岩版」に分類している。また児玉は、三角形岩版が大規模配石遺構や環状列石が発見される遺跡から出土する例が多いことから、葬送儀礼あるいは季節や経年の祭祀の時に使用された可能性を指摘する。これらの三角形岩版は、他の土製品や石製品に比べて数量が突出しており、当該期の儀礼行為を研究する上では重要な要素である。これらはほぼ完形品であるが、土偶と



第6図 榧の木遺跡・一本松遺跡出土の「第二の道具」

同様に、意図的に破壊されたのか検討が必要である。

3. 考察

1) 十腰内I式土器の編年的位置づけ

槻の木遺跡の十腰内I式土器は、層位的に出土しているわけではないことと資料数が乏しいことから、いわゆる前十腰内I式段階、十腰内I式古段階・新段階への対比にとどめたい。

最初に、前十腰内I式期と考えられる資料は、第2図5や第3図7があげられる。特に、7の壺形土器は方形の隆帯区画文で、隆帯上に縄文を施文する点や中期末葉の胎土に類似するなどの特徴から、本段階に位置づけられる。

その他は、十腰内I式土器であると考えられ、多くは新段階に位置づけられる。このなかで古段階と思われる資料は、壺形土器の第4図1～3である。これらの胴部文様は、太く幅広の隆帯によって区画文が描かれ、その周囲が沈線によって縁取られ、これは比較的古い要素と考えられる。

一方、新段階の資料は、第2図1～4・6～8、第3図1～7、第5図1～3があげられる。これらの多くは、2本の沈線区画内に櫛歯状の条線文や平行沈線文を充填する文様を有する。第2図2や第3図3などのように、文様帯が胴部上半部にまとまる傾向が認められ、これも新段階の要素とされている。

前述した沈線間に条線文や平行沈線文を充填する手法は、米代川流域など南側の地域では主体的に認められない施文手法であり、青森平野の小牧野遺跡や稲山遺跡などで普遍的に認められることから、地域性の一つとして理解される。

2) 十腰内I式土器の器種構成の意義

本土器群は、深鉢を中心として浅鉢、台付鉢、壺を主体として、皿、注口土器などを僅かに含む(第7図)。これらは、関東地方の堀之内式土器と共通する要素を持ちながら、地方色の強い土器様式を発達させる。しかし、これらの地域性は後期中葉に広域的に加曾利B1式化する流れのなかで収斂する。ここでは、主な器種について、機能・用途を中心に地域的特性を明確にしておきたい。

(1) 浅鉢

この時期の特徴的な器種の一つとして、浅鉢があげられる。東北地方北部の浅鉢は、円筒下層式期か

ら榎林式期まで存続するものの、最花式期には土器器種構成から姿を消す。これは同時期に東北地方中・南部を中心として、注口付浅鉢が普及する動態とは大きく異なる(阿部2006a・2008)。

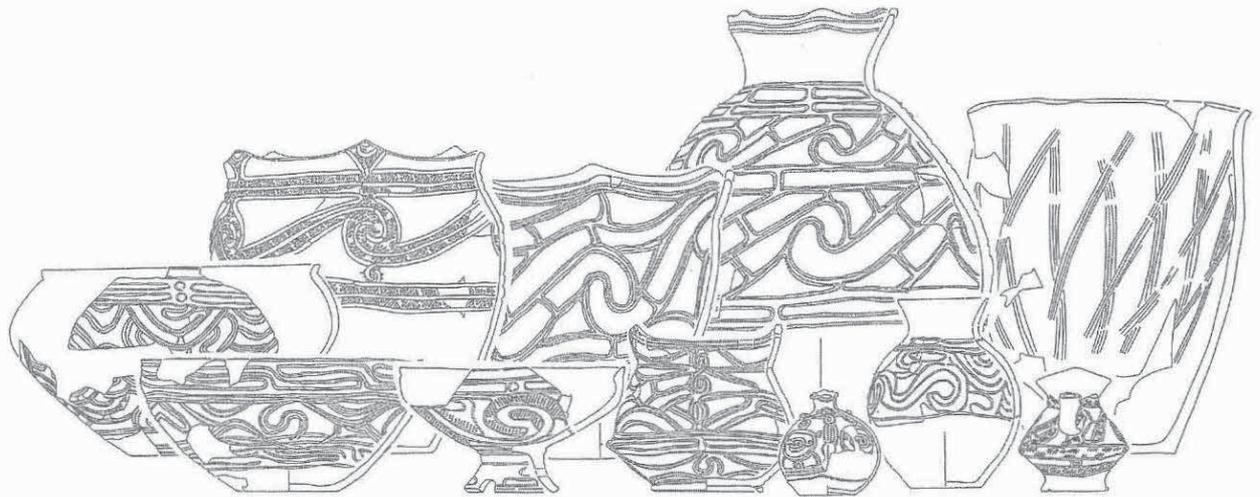
東北地方北部では、後期前葉になって再び浅鉢が出現するが、十腰内I式期の浅鉢には煮沸に伴うスス・コゲの付着は一切認められない。東北地方中・南部の中期末葉に出現した注口付浅鉢は煮沸痕が顕著に認められ、この器種は少なくとも後期初頭まで存続して後期浅鉢へと変遷すると考えられる。これは、十腰内I式期の浅鉢が煮沸の用途を含まないということであり、一般的に盛付具という可能性が考えられる。また当該期の浅鉢の内外面には赤彩痕が残る例が多く、全面的に赤彩が施されていた可能性がある。

(2) 壺形土器

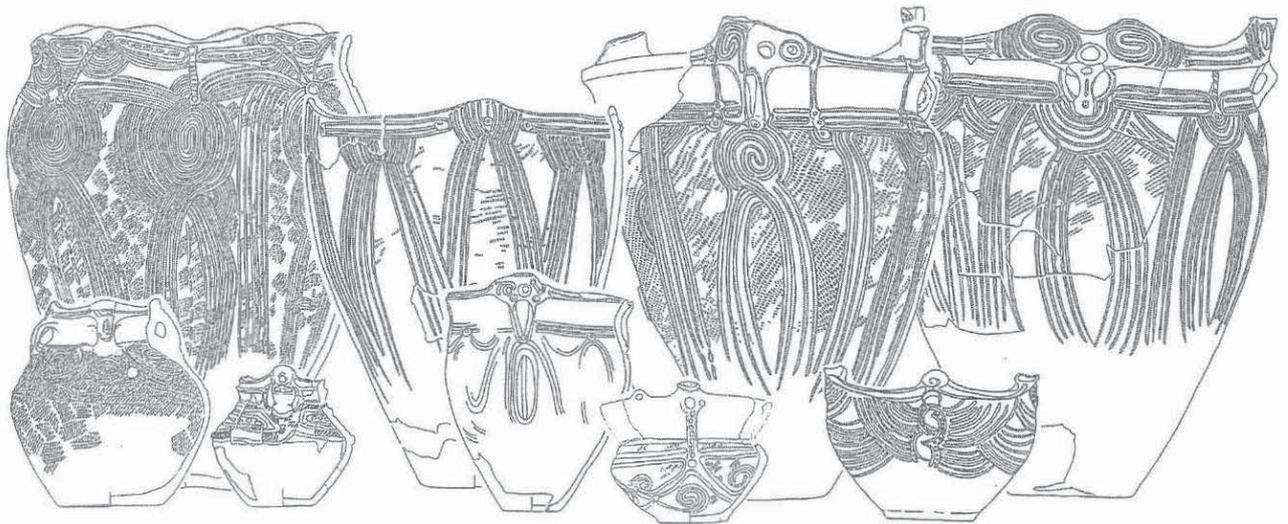
壺形土器は、後期前半期の特徴的な器種であるが、東北地方北部で独自に発達し、多様な用途を有していたと推測される。例えば、埋葬(再葬)に使用されるもの(葛西2002・2006ほか)や、胴部文様に狩猟文を描く「狩猟文土器」(小山1997、福田1989・1998、渡辺1999ほか)、いわゆる「切断蓋付土器(壺)」と呼ばれるものがある。この特殊な切断蓋付壺は、生乾き状態で土器を切断して体部と蓋部とに二分する土器であり、中期終末まで遡るとされる(成田1986・1999)。これらの用途は明確ではないが、「祭祀儀式用の土器」(成田1986)、「埋葬関連の容器(副葬品・供献品)」(成田1999)、「子供の再葬墓」(葛西2002・2006)、などの説がある。

また狩猟文が壺形土器に描かれる例は、比較的古い段階まで遡り、主体は十腰内I式期以前にある(渡辺1999、斎野2006ほか)。今回報告した一本松遺跡出土資料にも狩猟文土器の破片資料が1点認められる(第5図4)。

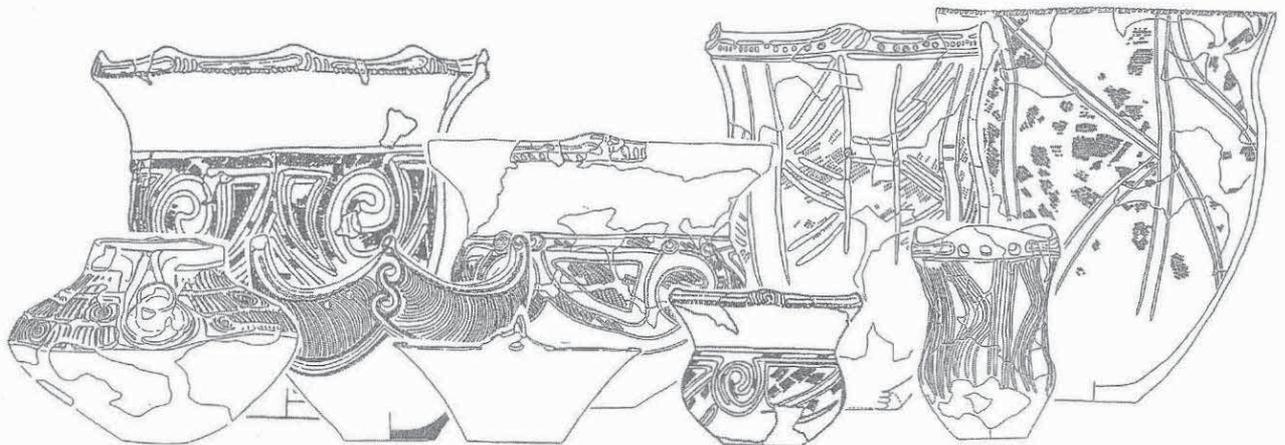
そもそも東北地方北部の壺形土器は、中期後半期に盛んに作られるようになり、これらは有孔鏝付土器が東北地方で在地化して派生したと考えられる(阿部2005・2006a・2008)。そういった中から特殊な切断蓋付土器などが出現するのだろう。中期末葉の壺形土器は、東北地方の南北で特徴的な把手形状が発達し、東北北部の壺は頸部に横位隆帯と4単位の橋状把手が付属するものである。一方、東北地方



1. 東北部の土器器種の構成(十腰内I式)



2. 東西南部の土器器種の構成(網取式)



3. 新潟県の土器器種の構成(南三十稻場式)

第7図 東北地方南北における後期前葉の土器器種構成

中部・南部の壺形土器は、土器両側面に梯子状把手が2段付属するもので、関東地方の瓢箪形注口土器と共通している。これらの把手は、吊るすためのものという見方もできるが、口縁部に蓋をするための把手と考える方が妥当であろう。これらの壺の用途は一つとは限らないが、内容物を貯蔵もしくは保管するための器であり、把手形状とともに発達したと推測される。

(3) 台付鉢

台付鉢も当地域で発達した器種の一つで、同時期の東北地方南部や新潟県などではほとんど認められない器種である。この台付鉢は、スス・コゲなどの炭化物の付着が見られず、煮炊きに関わるものではないと理解される。この点は縄文時代中期の台付鉢とは異なる点である。これらの器種は、中期から系統的に発生したというよりは、前述した浅鉢から派生した可能性が高い。これが縄文時代晩期大洞式土器の台付皿などに繋がることも想定されるが、その系譜関係はまだ不明である。

また用途は、前述したように、スス・コゲの付着が認められないことから煮沸ではないことは確かである。用途に関しては、一般的ではあるが、盛付具のような使い方をしたと推測され、浅鉢に近いものと考えられる。

(4) 注口土器

十腰内I式期の注口土器は稀で、出土例も小形の注口土器に限られる。例えば、青森市小牧野遺跡(上野・児玉1996)などの例があげられるが、これらは非常に小形品である。このような注口土器のあり方は、同時期の関東地方や東北地方南部とは大きく異なる。つまり、縄文時代後期初頭～前葉(称名寺II式期～堀之内I式期)にかけて、東北地方南部から関東地方では、注口土器が成立して広域的に普及し始める。これらの注口土器は、中期末葉に関東地方などで出現する瓢箪形注口土器が変化して成立すると考えられている(丹野1985、鈴木1992、上野2004、阿部2006b・2008)。当地域の注口土器は、十腰内I式期新段階に出現が見られるが(榎本2008)、十腰内I式期における注口土器は客体的存在にすぎず、普及するのは後期中葉以降である。

3) 小 結

十腰内I式期の器種構成については、葛西勳や成

田滋彦などがまとめている。他地域との比較からその特徴を見ると、やはり壺や浅鉢を特徴としている。東北地方南部以南では、後期浅鉢は煮沸に利用される割合が多くなる(阿部2006a・2008)が、東北北部の浅鉢は煮沸痕が認められない。このことは、同じ浅鉢でも用途やその出自も異なる可能性を示している。壺形土器も東北地方南部に比べて際立っており、その用途も多様に発展している。これと対の関係にあると推測されるのが関東地方や東北地方南部で発達する注口土器である。その出現も有孔鏝付土器やその系譜上にある壺形土器に求められることから、両者は用途上で関連している可能性がある。

この他にも、深鉢では口縁部の屈曲部の有無において違いが見られる。この屈曲も次第になくなる傾向にあるが、煮沸具として見るならば、キャリパー形と同じような効果を有していた可能性も想定される。十腰内I式土器の場合は、口縁部に屈曲を持たないのが特色である。この器形は、中期末葉の大木9・10式土器や、それ以前の榎林式土器、円筒上層式土器まで遡ることができる。実際に系譜的に繋がるかどうか詳細な検討を要するが、東北地方北部の深鉢の伝統と見ることができる。また台付鉢も同時期の東北地方南部や関東地方では認められない器種であり、東北地方北部で独自に発達した器種であると考えられる。

このように、磨消縄文化する縄文時代後期前半期の土器様式のなかにおいても、それぞれの地域性を有していることが分かる。これらの土器器種の多様化は、「土器が縄文社会において果たした機能・役割の多様化を意味する」(小林1988・1994)。しかし、これらが生業や調理手法・調理される具材の違いを反映しているのか、単なる文化的個性でしかないのか現段階では分からない。これを解明するためにも、個々の土器器種の機能・用途についても、さらなる研究の深化が必要である。

4. おわりに

本学考古学資料館所蔵資料である青森県平内町榎の木遺跡と一本松遺跡の出土資料、特に縄文時代後期前葉(十腰内I式期)に関連する資料を整理し、図化報告した。これらの資料は決して豊富とは言えないものの、本年度調査を行った北秋田市石倉岱遺

跡の出土資料（十腰内Ⅰ式期主体）とともに、本プロジェクトの重要な基礎資料に位置づけられる。

以上、伝統文化リサーチセンターの「祭祀遺跡に見るモノと心」グループにおける考古学資料館所蔵資料の整理活用の一環として、対象となる両遺跡の出土資料を整理・図化した。しかしながら、縄文時代中期や晩期の良好な資料も多く存在し、これらの整理活用も今後の課題である。今回の槻の木遺跡・一本松遺跡出土資料の研究において、國學院大學の小林達雄教授、谷口康浩准教授よりご指導頂いた。また以下の方々からご指導とともにご協力頂いた。文末ながら感謝申し上げたい（敬称略）。

阿部義平、朝倉一貴、内川隆志、榎本剛治、加藤里美、國木田大、佐藤直紀、高橋智也、藤尾慎一郎
国立歴史民俗博物館

註

- (1) 本資料は、平成16年に、國學院大學考古学資料館に移管されたもので、完形土器と未洗浄の遺物（コンテナ入）、土製品・石製品などがある。
- (2) 槻の木遺跡は、昭和24年から3回の発掘調査が行われ、縄文時代晩期前半を中心とする資料が出土しているとされているが、詳細は不明である（福地1977）。
- (3) 一本松遺跡は、詳細な経緯は不明であるが、田中忠三郎氏、平内町郷土研究会などによって発掘調査された旨が報告されている（田中1968）。また平内町史によると、二軒の竪穴住居跡や縄文時代早期・前期・中期・後期などの資料が出土しており、十腰内Ⅰ式土器も誌確認されている（福地1977）。
- (4) 平成21年度の春季企画展では、槻の木遺跡・一本松遺跡の出土資料を中心に、「景観」、「環状列石」、「第二の道具」などを対象として研究成果の公開を行った。
- (5) 資料の実測・トレースは、第2図～第4図・第5図1～3、第6図1・4～9、12～14を阿部が行い、第5図4、第6図2・3・10・11を加藤（元）が行った。執筆分担は、1. はじめに（阿部）、2. 出土資料（各実測担当部分を執筆）、3. 考察（阿部）・4. おわりに（阿部）である。
- (6) サンプル分析は、東京大学北海文化研究所実習施設助教の國木田大氏にお願いした。

【引用参考文献】

阿部昭典 2005 「縄文時代中期末葉の壺形土器」『東アジアにおける新石器文化と日本』166～181頁 國學院大學

- 21世紀COEプログラム研究センター
阿部昭典 2006a 「縄文時代中期末葉の器種の多様化」『考古学』IV 103～126頁
阿部昭典 2006b 「注口土器成立以前の様相」『月刊考古学ジャーナル』No.550 10～15頁
阿部昭典 2008 『縄文時代の社会変動論』アム・プロモーション
阿部昭典 2009a 「縄文時代における徳利形土器の祭祀的側面の検討」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第1号 1～14頁
阿部昭典 2009b 「東北北部における「第二の道具」の多様化」『環状列石をめぐるマツリと景観発表資料集』1～12頁 國學院大學伝統文化リサーチセンター
阿部昭典 2010 「鐸形土製品に関する一考察」『日本基層文化論叢』6～16頁 雄山閣
五十嵐一治 1999 『伊勢堂岱遺跡』秋田県教育委員会
今井富士雄・磯崎正彦 1968 「十腰内遺跡」『岩木山』316～608頁 弘前市教育委員会
上野隆博・児玉大成ほか 1996 『小牧野遺跡』青森市教育委員会
上野由美子 2004 「瓢箪形注口土器の成立と展開」『研究紀要』19号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 109～131頁
江坂輝弥 1960 「三脚石器と三角形土製品」『土偶』149～162頁 校倉書房
榎本剛治 2002 「第5章まとめと考察 第2節伊勢堂岱遺跡出土の後期前半の土器群について」『伊勢堂岱遺跡発掘調査報告書Ⅰ』87～89頁 鷹巣町教育委員会
榎本剛治 2005 「秋田県における湯舟沢A式土器の検討」『葛西勳先生還暦記念論文集』137～148頁
榎本剛治 2008 「十腰内Ⅰ式土器」『総覧縄文土器』530～535頁 アム・プロモーション
榎本剛治 2009 「米代川流域における環状列石の祭祀・儀礼」『環状列石をめぐるマツリと景観発表資料集』71～76頁 國學院大學伝統文化リサーチセンター
江原 英 2001 「縄紋後期初頭から前半における壺形土器覚書」『研究紀要』第9号 39～56頁（財）とちぎ生涯学習文化財団
遠藤正夫 1987 「第X章分析と考察 第二節(2)土製品」『大石平遺跡Ⅲ』416～417頁 青森県教育委員会
押山雄三・日塔とも子 1994 『鴨打A遺跡』郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団
葛西 勳 1970 「三角形岩版考」『うとう』第74号 32～39頁
葛西 勳 1979 「十腰内Ⅰ式土器の編年的細分」『北奥古代文化』11 1～44頁
葛西 勳 2002 『再葬土器棺墓の研究』「再葬土器棺墓の研究」刊行会
葛西 勳 2006 『続・再葬土器棺墓の研究』「再葬土器棺墓の研究」刊行会
加藤元康 2009 「縄文時代後期のクマ表現」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第1号 15～24頁
金子昭彦 1996 「十腰内Ⅰ式の三細分についての考え方」

- 『岩手考古学』第8号 41～60頁
- 金子昭彦 1997 「十腰内Ⅰ式と「大湯式」における壺形土器の変遷」『岩手考古学』第9号 1～22頁
- 金子拓男 1983 「三角形土版・三角形岩版」『縄文文化の研究』9 縄文人の精神文化 114～127頁 雄山閣
- 菅野和郎 2008 「ミニチュア土器」『総覧縄文土器』1089～1091頁 アム・プロモーション
- 児玉大成 1997 「三角形岩版について」『青森県考古学』第10号 17～30頁
- 児玉大成 1999 「小牧野遺跡における環状列石の構築時期」『青森県考古学』第11号 15～32頁
- 児玉大成 2001 「縄文後期前半の岩版類と大型配石遺構」『渡島半島の考古学』79～108頁 南北北海道考古学情報交換会20周年記念論集作成実行委員会
- 児玉大成 2003 「小牧野遺跡における縄文後期前半の土器編年」『東北・北海道の十腰内Ⅰ式再検討』27～48頁 海峡土器編年研究会
- 児玉大成 2009 「青森県における環状列石と祭祀・儀礼」『環状列石をめぐるマツリと景観発表資料集』65～70頁 國學院大學伝統文化リサーチセンター
- 小林達雄 1988 「縄文土器の器形と用途」『縄文土器大観3 中期Ⅱ』264～270頁 小学館
- 小林達雄 1994 『縄文土器の研究』小学館
- 小林達雄編 1988 『古代史復元3 縄文人の道具』講談社
- 小山彦逸 1997 「縄紋時代の狩猟文土器について」『青森県考古学』第10号 1～16頁
- 斎野裕彦 2006 「狩猟文土器と人体文」『原始絵画の研究論考編』六一書房 233～271頁
- 佐藤雅一・阿部昭典ほか 2005 『道尻手遺跡』津南町教育委員会
- 品田高志・平吹 靖 2001 『十三本塚北』柏崎市教育委員会
- 鈴木克彦 1997 「注口土器の研究」『研究紀要』第2号 1～38頁 青森埋蔵文化財調査センター
- 鈴木克彦 1998 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・4」『縄文時代』第9号 81～117頁
- 鈴木克彦 2000 「岩手、秋田県北部の後期初頭土器の編年－湯舟沢A式の設定と提唱－」『岩手考古学』第12号 1～21頁
- 鈴木克彦 2001a 「東北地方北半部の中期・後期区分に関する編年学的研究(上)」『縄文時代』11
- 鈴木克彦 2001b 『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣
- 鈴木克彦 2002 「十腰内Ⅰ式土器の細別に係る型式学的研究」『岩手考古学』第14号 1～44頁
- 鈴木克彦 2007 『注口土器の集成研究』雄山閣
- 鈴木徳雄 1992 「縄紋後期注口土器の成立」『縄文時代』第3号 63～95頁
- 高島好一・矢島敬之 2004 『作B遺跡』いわき市教育委員会
- 高橋 潤 1976 「鐸型土製品についての一考」『うとう』第82号 31～38頁
- 田中忠三郎 1968 「平内町一本松遺跡の発掘について」『うとう』第70号 49～59頁
- 田辺早苗・國島 聡ほか 1991 『関越自動車道関係遺跡発掘調査報告書 城之腰遺跡』新潟県教育委員会
- 角田猛彦 1881 「陸奥國東津軽郡石器時代の遺跡探究報告」『東京人類学会雑誌』第6巻第64号 359～362頁
- 土肥 孝 2010 「鐸形土製品・靴形土製品の機能・用途について」『月刊考古学ジャーナル』No.607 33～36頁
- 富樫秀之・金内 元ほか 2002 『奥三面関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅢ アチャ平遺跡(上段)』朝日村教育委員会
- 仲田茂司 1992 『三春ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅴ 西方前遺跡Ⅲ』三春町教育委員会
- 成田英子 1974 「日本石器時代における土版・岩版の研究」『遮光器』8号 87～99頁
- 成田滋彦 1981 「青森県の土器」『縄文文化の研究』4 123～132頁 雄山閣
- 成田滋彦 1986 「切断蓋付土器考」『弘前大学考古学研究』第3号 19～33頁
- 成田滋彦 1989 「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観』4 277～280頁 小学館
- 成田滋彦 1996 「縄文時代の片口・注口土器」『青森県考古学』第9号 1～6頁
- 成田滋彦 1999 「異形土器 切断蓋付土器」『研究紀要』第4号 31～46頁 青森県埋蔵文化財調査センター
- 樋口清之 1933 「鐸状土製品」『史前学雑誌』第5巻第5号 83～84頁
- 福島雅儀ほか 1989 『三春ダム関連遺跡発掘調査報告書1 柴原A遺跡(第1次)折ノ内遺跡』福島県文化センター
- 福田友之 1989 「「狩猟文土器」考」『青森県立郷土館調査研究年報』第13号 83～94頁
- 福田友之 1998 「狩猟文土器再考」『北方の考古学』115～125頁 野村崇先生還暦記念論文集刊行会
- 福地 勤 1977 「第2章町のあゆみ 先史時代」『平内町史上巻』平内町
- 文化財保護委員会 1967 『全国遺跡地図(青森県)』
- 本間 宏 1985 「東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態」『よねしろ考古』1 9～30頁
- 本間 宏 1987 「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)」『よねしろ考古』3 31～50頁
- 本間 宏 1988 「縄文時代後期初頭土器群の研究(2)」『よねしろ考古』4 71～84頁
- 本間 宏 2008 「南境式・網取式土器」『総覧縄文土器』544～551頁 アム・プロモーション
- 渡辺 誠 1999 「第5編 狩猟文の研究」『大越・江ノ上B遺跡』103～117頁 大越町教育委員会